

カボチャミバエ

カボチャミバエは全国的に発生が少なく、本県では2010年頃から発生がみられるようになり、比較的なじみのない害虫である。

本県での被害は、主に奥能登地方の抑制カボチャで発生している。

1. 形態

成虫は雌が体長約13mmで、雄が約10mmである。全体が淡黄褐色であり、翅は透明である。胸部の背側は黄褐色で中央から後方に3本の黄色縦線がある。腹部は淡い黄褐色で、各節には黒褐色の横線がある。

卵は灰白色、長楕円形で一端は尖り、1.1mmほどである。

若齢幼虫は白色であるが、老熟すると黄白色になり、老齢幼虫は長さ15mmほどである。

蛹は赤褐色で俵状であり、長さ7mmほどである。

なお、形態的には、ミスジミバエによく似ていることから混同されやすいが、本虫には小楯板の先端に黒い斑がないことや雄成虫はキュウリアなどの誘引剤には誘引されないなどの違いがある。また、ミスジミバエの幼虫はウリ科植物の花のつぼみを食べ、カボチャミバエのように作物への加害はない。



図1

2. 生態

年に1回発生し、蛹で越冬するといわれている。成虫は7月下旬から出現し（図1）、畑周辺の雑草の葉裏に潜み、産卵時期になると雌だけがウリ類に飛来する。

雌は産卵管を果実に挿入し、1回当たり10～40個の卵を産みつける。卵期間は真夏では5～6日、初秋では10～12日である。

幼虫期間は約1カ月程度。ふ化した幼虫は果肉の内部深くへと食入して中心部に達し、種子とその周辺を食害する。幼虫は発育するにつれて、さらに中心部から外側へと食害を続ける。幼虫は主に果実が腐敗した後に果実から脱出するが、腐敗前に果実に穴を開けて脱出する場合もある。脱出後は、土に潜り蛹化する。

本種は平坦部より中山間、山間部までの発生が多い。
なお、ウリ科作物以外ではカラスウリなどのウリ科雑草やトマトにも寄生する。

3. 被害

幼虫が果実の果肉を食害する。カボチャの場合、種子の周囲を食害し可食部の被害は少ない。未熟な果実に多数の幼虫が寄生すると果実の落下、腐敗をもたらすが、成熟した果実では少数の幼虫が内部を食害しても腐敗せず、外観が健全果と区別できないため、市場や家庭ではじめて被害に気付くことが多い。

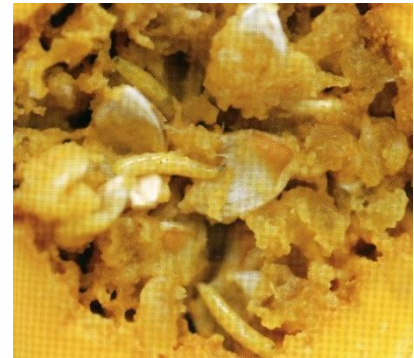


図2

また、産卵孔からしみ出る汁によりカボチャやキュウリでは透明なあめ色、ユウガオでは不透明なしろうゆ色の汚れができる。

老熟幼虫は果実の内部で独特な跳躍行動をするので、果実に耳を当てて跳躍音が聞こえるかどうかから被害果を判断することもできる。

4. 防除対策

産卵部位や加害が果実内のため、いったん果実内に侵入すると防除は難しい。

薬剤防除は、幼果期に果実内に侵入するため、開花期から幼果期に重点的に防除する。